

発表題目：

地震とダイナマイト

—サンゴ礁破壊をめぐるインドネシア・バンガイ諸島のサマ人のジレンマ—

所属： 京都大学アジア・アフリカ地域研究研究科博士一貫課程

氏名： 中野真備

1200 字程度で発表内容を記載してください。

インドネシア・中スラウェシ州は、死者・行方不明者 3000 人以上を出した 2018 年スラウェシ島地震 (M7.5) に代表されるように、地震頻発地域として知られる。中スラウェシ州東端部に位置するバンガイ諸島も、その例外ではない。海辺の杭上集落に居住するサマあるいはバジャウとよばれる人びとの生活史や移住史は、地震災害とともに刻まれてきた。

バンガイ諸島沿岸部のサマ人集落 A 村も、地震頻発地域のひとつである。本研究では、A 村で発生した近年の地震・津波被害への地域住民の対応、特にダイナマイト漁によるサンゴ礁破壊と津波を関連づける言説に着目し、その背景にある、A 村の直面する課題と地域住民の葛藤を描くことを目的とする。

バンガイ諸島で発生した地震のうち、2000 年の大地震と津波は、近年で最も大きな被害であった。バンガイ諸島周辺で最大のサマ人集落である A 村は、当時沖合にあった杭上集落のすべてが流された。A 村の住民は沿岸部に大規模移住をおこない、サンゴ石を積み上げた人工島や石垣を建設したり、マングローブを植えたりして津波に備えるようになった。2016 年以降、インドネシア国家防災庁の取り組みにより、大規模な防潮堤の建設が続いている。他方で、バンガイ諸島の海岸部と内陸部の、生態環境条件や文化的な差異、漁撈活動への利便性を背景とし、サマ人はあくまで海辺で生きることを選択する。実際に、沖合の旧集落に家を再建したり、沿岸部では海上家屋の建設が進んだりするなど、A 村の面積は海側へと拡大し続けている。しかし 2019 年には、バンガイ諸島を震源とする M6.8 の地震が発生し、海上集落の住民は陸へ避難する事態となった。

このような状況について、A 村のサマ人漁師たちは、かつて沖合で防潮堤の役割をしていたサンゴ礁を、ダイナマイト漁で破壊しつくした結果、大津波を防ぐことができなくなったと解釈する。ダイナマイト漁従事者が増加している背景には、これまで漁に必須とされてきたような、漁場の位置特定技術や、漁獲期の見定めなどの民俗技術をほとんど必要とせず、かつ大量の漁獲を得られるという利点がある。彼らにとって海とは、無尽蔵の資源があり、資源管理など必要のない空間であった。他方、近年では、大学教育を受けて A 村に戻ってきた非漁師の若年層は、資源破壊の危機感から、ダイナマイト漁をやめて従来の漁法に転換するよう漁師らに交渉を試みる。ここからは、非漁師の若年層は、「伝統的な」環境意識が、一般的な自然・環境保護とは合致しないと考えていることがうかがえる。それでも漁師らがダイナマイト漁の恩恵を手放さず、しかし彼ら自身がダイナマイト漁と津波被害を関連づける言説を語るのはなぜだろうか。

本発表で提示する事例は、地震頻発地域での定住と、海を基盤とした生活を選択した、現代のサマ人漁師が、これまで継承されてこなかった資源管理の問題に初めて直面する戸惑いと葛藤の姿である。